

愛は忘れず、恨みは忘れよう

群馬県 中村 幸生

一 海外居住の動機

海外居住の動機は極めて簡単だ。私は中国で生まれたのである。では、父の海外居住の動機は何か。これも簡単、貧困である。では、なぜ青島から吉林に移ったか。それは満州事変以後の排日のためである。

父は、長野県下伊那郡市田村の代々庄屋、村長を務める豪農、中村家の三男として明治二十六年に生まれたのだが、全財産は長男が受け継ぎ、次男は松本市で写真屋となり、三男の父は小学校だけの教育を受け、中等教育を受けることを許されず、やむなく軍人となった。憲兵である。第一次世界大戦で、日本は山東省におけるドイツの勢力圏を占領し、父はそこで勤務した。

講和後、父は除隊して民間人となり、青島市に住ん

だ。青島にはドイツ人が建設した良港があり、大工業地帯に成長していた。

父はドイツ人のもとで働いたこともあるので、パン、バター、ハム、ソーセージは我が家の普通の食品であった。また、父はハイカラであり、自由主義であった。青島市に住む日本人はだいたいそうであった。

たぶん上海や天津の日本人も同様であろう。

ある人の尽力で大分県の娘と結ばれた。つまり私の母である。父の実家は、他国の者と結婚したといって喜んでくれなかった。本家の意向を尊重しない個人主義的な行為と受け取られたのであろう。在留邦人はみな親しく付き合ひ、中国人とも分け隔てなく交際していた父にとって、大分県を「他国」と考える見の狭さは、ばかばかしいものであった。母もまた進歩的だったので、戦後長野県に引き揚げた後、伝統社会に溶け込めなかつたようである。

父は青島が日本領になると思っていたが、ワシントン会議で、日本は山東省の権益を中国に返還した。私は大正十四年の生まれであるから返還後である。三歳

上の姉がよく言っていた。「あたしは日本生まれだが（占領中の青島で生まれた）、お前は中国生まれよ」。他に二歳上の姉がいたが、私が生まれて間もなく疫癘で死んだ。死んだ子は利口だという諺どおり、父母は後々までこの子を褒めるので、姉はつらかったと言っていた。ともあれ末っ子の長男として私は過保護に育った。

裕福な家では、アマ（中国語でベビシッターのこと）を雇ったので、私は日本語と並行して中国語を覚えた。アマがいなくなると中国語を忘れてしまったが、中国人に対するコツを知っているので、後に何回も救われたことがあった。中国在留邦人がすべて中国語を話すわけではないが、父は流暢に話した。

二 排日、日貨排斥

私の幼時に大事件が何回も起こった。後にそれを三回の山東出兵と教えられた。在留邦人が領事館に避難したり、青島中学の生徒が武装して、父がその指揮をとったこともあったとのことである。

父から聞いた話であるが、在留邦人は排日、日貨排

斥に悩んでいたという。排日は間欠的に起こる。日中間に何かの衝突があったときである。中国人学生が中国人商店から日貨（日本製品）を持ち出し、街頭に積み上げて石油をかけ、火を付けて「日本帝国主義を倒せ、日本製品を買ちな」と氣勢をあげる。日本人は石を投げられるおそれがあるので外出を避ける。しかし、間もなく排日熱も冷めて、日本人と中国人は仲良く平和的に商売をしていた。日本人は「政府があんなこと（対中国強硬政策）をするので本当に困ったことです」などと言い、中国人は「若い者があんなこと（日貨排斥）をするので本当に困ったことです」と言い、互いに苦笑していたとのことである。

戦後の全学連が反米を叫ぶと、日米双方の親が、困ったことですねと話し合うのと同じである。

あるとき、日本海軍の陸戦隊が街角に立って、われわれ小学生の登下校を保護した。ときどきそうしたことがあったが、そのときは満州事変が原因だった。上海にも飛び火したから対岸の火事ではなく、青島の邦人は肝を冷やした。満州事変に対して中国の労働者は

ストライキで対抗したので、父の勤めていた貿易会社（白須賀洋行）は何カ月も営業不能に陥った。港の荷を担ぐ労働者（クーリー）が積載を拒否したのである。ストライキの間に、父は休暇をとって、一家そろって日本旅行をした。姉と私にとっては楽しい旅で、見る物、聞く物すべて珍しい日本であった。

排日のストライキが解決したから戻れとの電報を受け取った父は、私たちを引き連れて青島に帰ったが、父は満州に移住することを考え始めていた。そこには排口がなかったからである。

五族協和、王道楽土の満州国はユートピアのように思えた。私は小学校二年生であったが、満州には排日がなく、中国人と対立せずに住むことができる、すばらしい国が生まれたということが嬉しかった。父は一年ほど様子を見るために満州を旅行し、われわれは昭和八年の三月に吉林市に移住した。

三 父の企業

父は間もなく銃砲火薬店を開いた。銃砲・火薬・爆薬類は重要な商品であるが、敵側（馬賊・匪賊）の手

に渡る恐れもあるので、警察と関東軍の厳重な管理下に置かれていた。そのため利益は大きく、わが家は豊かになった。父は関東軍の軍人と親しかったので、そのような特権を手にしたと思われる。

張大人という中国人は、ある商品の製造業者で父の顧客だったが、父と共同経営を望んだ。日本人と協力すればいろいろな便宜があったからである。父は企業を株式会社に変更の方が得たとアドバイスし、株式会社とは何かを詳しく説明して賛成を得て、父はその会社の社長になった。張大人は副社長である。

また、父の顧客の関百川という中国人は、石灰山の所有者で生石灰を製造していたが、それも株式会社に改め、父がその社長になった。関さんは副社長となった。合計五つの会社ができ、中村、張、関のトリオがそれを握った。

張大人の長男（一郎という）は延安で学び、そこで中国共産党に入った。そして反満抗日のために満州領内に潜入し、逮捕された。処置は過酷なものとなるであろう。張大人は父に懇願したので、関東軍に頼ん

で、泳がすという名目で釈放させた。張大人が感謝したのは当然であった。旧中国の習慣では、このような場合には各方面に賄賂を使う運動費として莫大な金額が請求されるのだが、父は一銭も取らなかった。

四 入営・敗戦

姉は新京の女学校を卒業して、花嫁修行として裁縫・生け花・茶道・弓道などを習っていた。戦争が厳しくなると、徴用を避けるため銀行に勤めた。私は教育を日本で受けるべく、旅順の中学校に入り、さらに旅順高等学校（旧制）に入学した。当時旅順は大連とともに日本領であった。

昭和十九年、一年繰り上げられた徴兵検査を受け、翌二十年三月、学業半ばで関東軍の兵士として中ソ国境に近い免渡河に入営した。四月、かねて願書を出していた東京帝国大学に入学できるとの知らせを受けたが、戦死を覚悟していたので、知らせは嬉しくなかった。

軍隊生活の苦しみは同じである。作業中にけがをした両手、両足が化膿した私は、八月六日、野戦病院に

入院した。三日ほど安静にしている、傷も治り始めていたが、ある日空襲警報が出て、退避せよとのこと。こんな所に米軍機が来るものかと、のろのろと退避していたが、後でその飛行機はソ連のものだったと知った。ソ連との開戦である。

幹部は顔色がなかった。私物を持って歩けと言われ、トラックで運ばれて病院列車に乗った。傷病兵は後退を許されたが、軍人は退却せずに戦ったであろうから、私は戦友たちの運命を気遣った。肉弾としてソ連戦車の下に飛び込んだのであろうか、また、軽傷の兵はトラックまで歩いたが、重傷患者はどうなったであろうか、一兵士の私には分からないことだった。

汽車は南下した。初めのうちは一日に三回にぎり飯が支給されたが、それが二回となり一回となった。包帯交換も途絶えた。数時間で着くはずの哈爾浜に着いたのは八月十五日だった。哈爾浜は大都会であるから、大きな病院に入って手厚い看護を受けるものと期待していたが、何の連絡もなかった。市内で銃声が起こったので不安だった。

正午に重大放送があるとのことで、駅のホームで待っている、それがあの玉音放送だった。汽車はさらに南下した。食事は一日一回の馬鈴薯となり、ついには途絶えた。

両手両足の傷の化膿はどんどん悪化して、ハエが卵を産み付けようとするので、扇子で追うのが忙しかった。機関車から溢れ出る熱湯を飯盒で受けて喉を潤した。死者が出始め、体力のある患者が穴を掘ったが、なかなか深くは掘れない。汽車が発車するときには置かなければならなかった。指揮をとる者はだれもいなかった。だれが死んだのか、何人死んだのか記録する者もいなかった。

八月十八日になって、軍人はみな捕虜になってシベリアに向かい、われわれ傷病兵は捨て去られたと悟った。汽車は朝鮮に向かうとのことであったが、吉林出身者がまとまって病院列車から離脱した。

吉林に着いたのは、八月二十日であった。私は歩けないほどに衰弱していたが、人に助けられて家に帰り着いた。家で看護してもらい、十分な食事をしたの

で、体力がつき傷も治り始めた。終戦後は統制経済がなくなつたので、パンを売りにくる者がいたが、値段は高かった。金が無くなると、石鹼、万年筆、最後には時計を腕から外してパンと交換した。

我々は、中国とソ連のいずれの支配を受けるのか、いずれが耐えやすいかを家族の間で話し合った。我々は、軍閥時代の中国兵を知っているので、これは相当ひどいものであろう、それに比べてソ連は少なくとも文明国であるから、まあ耐えられるであらうなどと話し合っていた。実際はその逆であった。ソ連兵の略奪・暴行が始まったのである。

彼らは九月四日に我が家に「来訪」した。銃器・火薬類はすべて中国側の市政府に引き継いであり、その書類も整っていた。ソ連の軍人たちは、その書類を読めないながらも一応の検査をした。

姉は頭を坊主刈りにして男の学生服を着た。ただし杞憂だった。坊主刈りにして学生服を着た姉は、私によく似ていたので皆で笑った。私と並んで座っていると兄弟に見えたのかもしれない。悲惨のどん底にあっ

ても笑いはあるものだった。

ある程度の現金・貴金属・時計を略奪しやすしい場所
にわざと置いておいたので、彼らは大喜びでポケット
に入れた。一人が飲む真似をした。酒を要求したので
ある。母は、それを承知しながらコップに冷水を
入れて差し出すと、飲み干して「うまい！」と言い、
礼を言ったので、後で大笑いとなった。ソ連の軍人に
も良いところはあつたが、それは将校と兵士とが和や
かな気持ちで結ばれていることで、これは日本の軍隊
にはないことだった。

五 父の逮捕・シベリア送り

略奪が済んで彼らが引き揚げるとき、父の名前が中
村五郎であることを確かめた後、聞きたいことがある
からと同行を求めた。不安だったが従わないわけには
ゆかなかつた。どこに行くのか尋ねたが答えてくれな
かつた。通訳は、下手な日本語で「すぐに帰るから
ね、心配しないでね」と言ったが真っ赤な嘘で、その
ままシベリアに連行されたのである。

松花江にダムができ、水没する所に炭坑があつた。

そこに大勢の白系ロシア人が働いていたが、彼らを転
職・移住させるために父は骨を折つた。彼らに感謝さ
れて以後はクリスマスに招かれる間柄になつていた
が、その白系ロシア人の中に反ソ運動をしていた者が
何人かいたのかもしれない。父は反ソ運動者の援助者
とみなされたのであろうか。あるいは彼らの中にソ連
のスパイがいたのであろうか。父は協和会の役員であ
つたが、協和会をナチスのような組織と見なしていた
のであろう。実際は隣組みたいなものだったのだが。

我々は何日待っても父が帰らないので、大変心細か
つたが、父はシベリアで裁判を受けて無罪となり、中
国領に戻されて釈放された。多くの人に助けられて半
年後に吉林にたどり着き、避難先の家族と一緒になつ
た。多くの人が重労働何十年の刑に服したことと比べ
ると、父は例外中の例外の幸運であらう。

我々は城内に住んでいた。そこは中国人居住地区で
日本人は少ない。日本人の多くは城外にいたので、城
内は危険であるからと城外に移るよう説得された。父
のいない間、家族三人は知人の花田さんを頼つて城外

に移った。その際、家財道具を大家さんの郭氏に預かってもらった。郭氏は返すつもりがないから喜んで預かってくれた。

六 捕虜・脱走

「八月十五日に軍籍にあった者は、良民証を渡すから、九月四日に小学校に集まれ」という通知が回ってきた。不安であったが、良民証がなければ今後暮らしてゆけない。だまされることを覚悟で小学校に行った。自分の卒業した日本人小学校である。様子を知っているから、ソ連兵がいたら引き返すつもりだったが、ソ連兵はおらず、何の沙汰もない。代表者がソ連軍司令部に問い合わせたところ、そんなことは知らないという。帰ろうとする我々に、良民証は警察で渡すという通知があった。我々が警察に行くと、完全に包囲されて、そのまま捕虜となってしまう。だまし討ちにあったのだから、だまし返そうと思った。

捕虜収容所は郊外の指導大学である。かつて図書館長をしていた山崎さんを訪ねて何回も来た所である。

大学は散乱した図書で埋まっていた。ソ連軍は図書に

興味を持っていないことが分かった。

毎日のように本物の日本軍人が武装解除されて集まってくる。二千人に達すると、隊伍を組んで出発した。話によるとウラジオストクに行き、そこから日本に帰るとのことである。ポツダム宣言の「武装解除された軍人は、速やかに故国に帰る」をだれもが信じて疑わなかった。

私は日本に帰されては困るので、父を奪われた母と姉の避難所、花田さんの家に帰りたかった。だから二千人の隊伍の中に入らないようにいつも逃げていた。ついでに言う、日本の将校は二千人を直ちに数えるが、ソ連将校はなかなか数えられない。ソ連人の良い点をもう一つ挙げると、人が良くて親切で、我々が作業をしていると五分もたたないのに「休め、休め」と言ってくれることである。髭を剃っている兵士が「お前も剃ってやろう」と言ってくれたことがある。パンや煙草を持っている兵士に、くれと言えば必ず惜しげもなく分けてくれた。

九月十九日、脱走を試みたが、寒さのため意志がく

じけて投降した。処罰はなかったが、日本の将校から「我慢をすればウラジオストクから国に帰れるのだから無謀なこととはするな」と諭された。その夜、毛布を何枚も着て歩哨線を突破した。匍匐前進の訓練がこんなとき役に立つとは思わなかった。髪の毛が逆立つほど恐ろしかった。寒さのためであろうか、実際に髪の毛が逆立った。

神に祈り続けた。「父がシベリアに拉致されて、母と姉とが困っております。私はどうしても母と姉の所へ帰らなければなりません。今まで私は唯物論だの無神論だのと生意気なことを言いましたが、全部撤回致します。どうか助けてください」。祈りながらも虫の良さに我ながらあきれ果てた。その後、哲学や宗教を論じるとき、脱走の際に神にすがったことを忘れてはいない。人にも正直に告白している。神の加護があったのか脱走は成功して、高粱畑に隠れて様子を窺った。オリオン座が傾いて朝となった。

敗戦後、市場経済が活発となり、毎朝野菜市が立った。そこに向かう中国農民の馬車が通りかかったのだ

並んで歩いた。「お前は何歳だ、二十歳であろう」と、ずばり言い当てられた。ソ連人に対しては年齢を偽れるが、中国人はごまかせない。「お前は兵隊であろう」「いや、違う。学生だ」私は学徒兵なので、外見上兵隊らしくはない。「どこから来たのか」「旅順からだ。戦争が終わったので、父と母がどうなったか心配で会いに来たのだ」

中国人にとって親孝行は最高の道徳なので、親孝行を持ち出すと大抵の中国人は同情してくれる。農民はその孝行息子を馬車に乗せた。馬車は先程脱走したばかりの捕虜収容所の正門前を通る。逃げてはかえって危険なので中国農民の手下になりました。ソ連兵の荷物検査があったが、軽くパスした。中国農民が恭しくお辞儀をするので、私も同じように深々と頭を下げた。その滑稽さを母に語りたくて道を急いだ。その農民には心からの礼を述べて別れた。

中秋節（旧暦九月十五日）の朝なので、町中が月餅の香ばしい匂いに溢れていた。耐えられなくなってお土産に三個買った。花田さんの家の扉を叩くと、母が

狂喜して出迎えた。お土産だよと言って月餅三個を差し出すと、呆れ返ったが、それでもおいしく食べた。今日に至るまで私が月餅を好むのはこのためである。

七 稼ぐ

花田さんの息子も、やはり捕虜となり脱走して同じ家にいた。また菅野さんという獣医も同居していたので、三人で協力して働き始めた。私は過保護に育ち、気楽な学生生活を過ごしてきたが、このときばかりは一家の支柱としての責任を果たした。

城内に野菜の市が立つ。日本人の行かない所であるが、我々は中国生まれなので中国人は怖くない。冗談も言えるし駆け引きもできる。三桁四桁の掛け算を、中国商人は暗算でやる。私は筆算で、ほぼ同時に答えを出して、一致するとお互いの計算能力を褒め合った。仕入れた野菜を大八車で日本人居住地区に運んで小売りする。買い物に不慣れな日本人からたいへんに喜ばれて良く売れた。

また、この三人組は街頭に立って太鼓焼（鯛焼きのような物）を売った。時々つまみ食いができて楽しか

った。日本人の難民が食いたそうな顔をしていたが、断るのがつらかった。日本小学校が難民収容所になっていることは知っており、そこが悲惨であることも承知していた。なぜ助けられないかというと、ソ連軍は市の官吏をすべて逮捕したので、やむを得ず日本人居留民は、張作霖・張学良時代を思い出して、居留民会を作ったが、ソ連軍はその会長以下役員すべてを逮捕してシベリアに送ったので、我々は自治組織を持てなかったのである。

八 八路軍と中央軍

中国人の暴動は終戦直後だけで止み、ソ連兵の姿も少なくなり、町は平穏となった。蔣介石の「暴に対して暴を以てせず」との方針はラジオで伝えられていた。一度、市場でチンピラに帽子を奪われそうになったが、大人たちが非難して取り戻してくれた。張大人は日本人が敵視されているときでも、こっそり隠れて差し入れをしてくれた。敵視されなくなると、他の人たちとの以前の交友関係が復活した。

年末ごろ、ソ連兵の支配に代わって、市は八路軍の

支配下に入ったらしかった。八路軍は日本人に恐れられていたが、無一物となった我々には怖いものなしであった。

一月、父が帰宅した。その知らせを聞いて、ある白系ロシアの婦人が訪ねて来た。その夫は指導大学の教授で、革命前にオデッサ大学で教育を受け、英独仏語に堪能な人とのことであるが、ソ連軍に拉致されたそうだ。シベリアで会わなかったか、何か情報はないかというのがその婦人の用件である。言葉は通じないが、父は知っているだけのことは話してあげた。ソ連は白系ロシア人に対して敵しい処置をとっているのである。それを伝えるのはつらいことだった。ともあれ父も無罪になったのだから、その教授も無罪になる可能性はあるので、希望を持って気長に待つように懇ろに話した。父が帰ってきた私たちの喜びに比べて、その婦人の悲しみはどのぐらい深いであろうか。私たちには良く分かるので、互いに涙にくれて抱き合っただけだった。

ある日、突然に張一郎が訪ねて来た。彼は八路軍の

幹部で、市では上から二番目、つまり副市長格である。日本人資本家の中には、人民裁判によって死刑にされた人もいるので、今度は当方が助けられる番であるから、我が家では一応の安心感があった。張一郎はたびたび遊びに来た。彼は日本の和菓子が好きであり、また、毒殺を恐れて外での食事ができないのである。何か困っていることはないかと言うので、大家の郭氏が我が家の荷物を預かったまま返してくれないと訴えた。それなら解決してやろうということになった。彼とともに郭氏を訪れた。郭氏は平身低頭して謝り、すでに半分ほど無くなっていた荷物を返してくれた。荷物の中に私の蔵書があったが、彼は岩波文庫の『阿Q正伝』を見て、良い物を読んでいるではないかと喜んだ。彼は日本語はできないが、『阿Q正伝』の字は日中共通なのである。以後彼と親しくした。

彼は私に中国の大学に入れと勧めるので、私もかなり心を動かされたが、すでに日本の大学に合格しており、父母は日本に帰国するので、私も父母に従わねばならぬと、またしても親孝行を持ち出して断った。ま

た彼は、彼らの新しい道徳についてもいろいろと述べたてた。

彼は従卒一人を従えていたが、衣食住はまったく同等であった。また、老百姓などに対してもきわめて謙遜で、少しも奢らず建設の意欲に燃えていて、孝行とは別の道徳があることを知った。「日本人は男女平等か」と言って、彼らの間にある男女平等を見せるために、女性の幹部を連れて来て紹介したが、方言の差が大きくて話ができない。彼は山西省のズーズー弁をおもしろおかしく話してくれた。

彼の建設意欲にもかかわらず、八路軍は中央軍（南京政府の軍）に負け続けていた。奉天城は陥落した。四平街では激戦があったと噂されていた。

おもしろい噂があった。中央軍の中に猿がいるというのである。猿は軍服を着て銃を持っている。そして垂直の扉をまじらの如く登る。扉の上を平然と走る。金を持っていて買い物もするが、一言もしゃべらない。しかし利口でだませない。買い物をしてお釣りが不足していると黙ったまま立ち去らない。お釣りや商

品を適正に渡すと黙って立ち去るといふのである。そんな馬鹿なことを本気にする人はいないが、ひよっとするとこれは中央軍の中に入った元日本兵ではなからうかと、だれでも考えた。

中央軍と八路軍の対立が厳しくなると、日本人は中立の立場であるから気が楽になってきた。長春が陥落し、中央軍は吉林市に迫ってきた。

張一郎と女性幹部は別れの挨拶に來た。我々は必ず戻ってくるとの決意を述べ、急いで立ち去った。粗末な服・武器で、女性幹部の乗り物はロバだった。

数日後、中央軍は吉林市の郊外に陣を構え、松花江の南の八路軍を砲撃した。大砲の発射音、砲弾が頭上を飛ぶヒュルヒュルという音、そして対岸で炸裂する音が一晩続いた。銃声もしばしば起こった。日本人は中立とはいえ、市街戦はたいへん危険で恐ろしかった。未明に大爆発音がして、松花江の大橋が爆破され、戦いは終わった。市街戦は避けられた。四月ごろのことであった。

翌日、目覚めると隣のYMCAは中央軍兵士の兵舎

になっていた。彼らが「グッドモーニング」と挨拶してくれしたのは大変に嬉しかった。日本人を「撃つな、奪うな、罵るな」との蔣介石の直々の教訓を受けてきたとのことで「敗戦にめげずに、将来は中国と日本は協力してソ連を打ち負かしましょう」と励ましてくれたので苦笑した。彼らは日本人と接触するための特別選り抜きの精兵だったようで、学徒兵であった。私も学徒兵だったので、彼らと親しくした。姉の髪の色はもうかなり伸びていた。彼らは姉の着物姿の写真を見て喜んだが、決して無礼なこととは言わずに自由に話合った。共にお茶を飲み、お菓子を食べ、日本の歌を聞かせた。一緒に公園に行ったこともある。市内にできたダンスホールの日本人ダンサーに興味を示していたが、性に関する悪い噂を聞いたことは一度もなかった。

私の語学力は大したものではなく、日常の話はできるが、難しい言葉は紙に書くのである。父は字が上手なので褒められた。私は下手だったが、漢文を書くので結構認めてもらった。彼らの政府は日本の凶書を取

集し、私はその目録を作るアルバイトをした。国は負けても文化を尊重してくれたのは嬉しい。

五月・六月は気候が良い。引揚げが近づいたので売り食いとなり、あまり働かなかった。母の宝石が一つずつ失われてゆくのは悲しいことだった。

ある日、関百川が米を差し入れに来た。彼は突然に、我輩は三十年来の国民党員であると宣言した。驚く我々に向かつて、孫文先生の理想をととうと述べ、我輩がいる限りあなた方に怖い思いはさせないから安心なさいと言った。魯迅の小説に出てきそうなことであつたが、ともかく力強く感じた。そのときドアが激しく叩かれ、国民党の官憲が父を取り調べるべく入って来た。郭氏が密告したものと思う。関百川は、我々と張一郎の関係を知っていたがら、「この方は決してそんな人ではありません。我輩は三十年来の……」と述べたて、孫文先生をまた持ち出したので、党の官憲は納得して帰ってしまった。父はかねてから五族協和・王道楽土・日満親善を力説していたが、今度は三民主義のお説拝聴となつたのである。

九 引揚げ・愛犬との別れ

八月、隊を組んで引揚げのため出発した。ボーイ（我が家の使用人）が愛犬テルを連れて見送りに来てくれた。敗戦後、テルをボーイに預けて飼ってもらっていたのである。我々は名残を惜しんで別れの挨拶を交わしたが、テルは再会を狂喜した。我々が汽車に乗り、テルも乗り込もうとするが、制止されると狂乱状態となって吠え立てた。涙が溢れ胸が締めつけられる思いであったが、発車するとテルはさらに激しく吠え、ボーイは手を振りながらも必死でテルを押し返していた。鳴き声は次第に遠くなり、機関車の音にかき消されたが、今も耳の底に残っている。

引揚げの苦難の旅は多くの経験者と同じで、筆舌に尽くし難いことであった。

十 日本での再出発

父の故郷、長野県に帰ってみると、父はともかくも母と私たちは故郷ではないので違和感があった。言葉も習慣も違ったからである。父は農協に仕事を得て働き始めた。力仕事であったので、父の腕はたくましく

なった。

私は、二十二年四月に上京して大学に復学した。高校の友人、野本君の友情により同居させてもらったので助かったが、そのことが無かったならば日本人でありながら日本を知らない私、しかも一文無しでは学業を続けられなかったであろう。アルバイトをすれば金は手に入るが学校には行けず、学校に通えば金はたちまち無くなる。試験のときは食べることができずに絶食した。絶食すると喉が渴くので一日中水を飲んで過ごした。悲しいものである。

大学は意地悪くも、戦時中の学生は語学力が足りないからとて、英・独語の試験を課した。リュックサック一つの着替えしか持たず、辞書さえ買えない私には過酷な試練であった。試験は脅かしで惨憺たる点数でもパスしたが、学力不足の劣等感と、お情けパスの屈辱感はずらいものだった。大学をあきらめる人も多かった。その人たちや戦場で亡くなった恩師や同級生、原爆で死んだ学友に比べれば幸せである。

一般の人が三年で卒業する大学（旧制）を四年かか

って卒業し、群馬県に高校教師として就職してどうやら飯が食えるようになった。

父は全財産を失って大きな打撃だったが、私は私の財産でないので未練はなく、再出発する希望に沸いていた。

旅順、大連からの引揚げ

埼玉県 丹 直 清

一 出生から終戦まで

私は、昭和五年九月二十八日に、父直能、母ノフの五番目の子として水戸市で生まれた。八歳上の長姉きみ、七歳上の長兄直久、四歳上の次姉ゆき、二歳上の次兄直武、その後五歳下の弟直秀が生まれ、六人同胞となった。

昭和八年、父が鳥取師範学校長となったのに伴い、一家は鳥取市に転居した。私は昭和十二年四月、鳥取師範学校附属小学校に入学し、昭和十五年、小学校四

年生のとき、宮崎師範学校附属小学校に転入した。父が宮崎師範学校長に転じたためである。

そして更に、父が旅順師範学校長に転じたことに伴い、昭和十七年夏、旅順師範学校附属国民学校に六年生として転校することとなった。この時満十一歳、間もなく誕生日の九月を迎えて満十二歳となる直前、私は旅順市に居住することとなったのである。この時の家族構成は、祖母こう（七十六歳）、父と母、次兄、次姉、私、弟の七人であった（長姉と長兄は内地に在住）。

私は昭和十八年四月、旅順中学校に入学、第二次世界大戦の戦局急を告げる中であって、まともな勉強は一年生の時くらいだった。二年生の時は、荒地地の開墾作業などに動員され、三年生からは、大連市の甘井子地区に所在していた工場へ、学徒動員ということで駆り出され、親元を離れて寮生活をさせられていた。

同級生のうち一部は、同じく甘井子に所在していた別の工場に学徒動員され、残りの者は、旅順市に残留して旅順工大で榴弾製造関係の作業などに動員された